

OPINION

私はこう考える

一杉正仁 獨協医科大学法医学教室准教授

1994年東京慈恵会医科大学卒業。94年から96年にかけて川崎市立川崎病院勤務。2000年東京慈恵会医科大学大学院医学研究科博士課程終了(医学博士号取得)。02年より獨協医科大学法医学教室准教授。栃木県警察本部嘱託警察医なども務める。専門は交通外傷分析、外因死の予防医学、法医学一般。

自分と胎児を守るために、妊婦さんにはシートベルトを着用してほしい

法医学を専門とする一杉さんが妊婦さんのシートベルト着用に関する研究を始めたのは3年前になる。クルマに乗っている時にシートベルトを着用しない妊婦さんは少なくない。妊婦さんが運転中や同乗中に万一事故に遭った時の被害を少しでも軽減するために、シートベルト着用の科学的根拠を明らかにして、着用を普及させたいと思ったことが研究の動機だという。

「日本では、妊婦さんの事故統計をとっていないので正確な数字はわかりませんが、アメリカでは、妊婦さんの6〜7%が何らかの外傷を負うと言われ、その3分の2は交通事故が原因とされています。年間で2・5万〜3万人弱の妊婦さんが負傷し、自動車乗車中の死者は85〜163人、胎児の死亡は800人以上です」。一杉さんによれば、栃木県での調査では妊婦さんのシートベルト着用率は3割程度。イギリスの75%、アメリカの84%と比べると、大きな差がある。着用しない理由として、①法的義務がない(63・2%)、②圧迫感がある(54・4%)、③着用するとかえって危険(44・1%)の3つがあげられている。①については、道路交通法施行令第26条3の第2項で、「妊娠中であることにより、シ



ない女性よりハンドルに約10cm近く近づいているという結果が出た。つまり、運転中の妊婦さんは身体が少し前に押し出されただけで、ハンドルにお腹を強打して

シートベルト着用の有効性を科学的に検証

一杉さんは妊婦さんの着用の有効性を検証する調査や実験を重ねた。まず、妊婦さんが運転する時に実際にどのような姿勢をとるか妊婦さん30人を対象に調査したところ、妊婦さんはお腹とハンドルとの水平距離が平均約14・5cmと、妊娠してい

しまつというところである。

さらに(株)本田技術研究所四輪開発センターと共同で、妊婦の体型を考慮した衝突試験用ダミーをクルマに乗せて追突実験を行った。ダミーの腹部には妊娠30週の子宮を模したシリコンラバー製の袋が装着されており、袋内部の圧力が測定できる。約30km/hの追突事故を想定して実験した結果、ダミーの子宮内部にかかった圧力は、シートベルトを着用した場合は約20キロパスカルと、着用しない場合は約60キロパスカルとなった。「妊婦さんの運転姿勢に関する調査でわかったことは、シートベルトを正しく着用していれば、正面衝突事故に遭った時でも、腹部とハンドルとの接触を予防できるということだ。また、ダミーを用いた追突実験でも、シートベルトを着用していれば、ハンドルと腹部との接触を回避でき、子宮内にかかる圧力を軽減できることがわかりました。交通事故で妊婦さんの子宮にかかる圧力が59キロパスカルでは胎児の20%、88キロパスカルでは50%が死亡するというアメリカの研究結果もあります。シートベルト着用によって、母親と胎児の安全に効果的であることが証明できたと思います」。

いまやるべきことは、こうした研究成果をもとにシートベルト着用についての正しい知識を多くの方々に伝えることだと言います。「妊婦さんが参加する母親教室での啓発や自動車販売会社などでの呼びかけ。さらには、こうした情報を知った方々が周囲の妊婦さんに着用をすすめてほしいと思います。生まれてきた子どもだけでなく、生まれる前の胎児の命を交通事故から守ってあげることが重要な少子化対策の1つです」。

SAFETY COMMUNITY

地域の交通安全教育



PTAでは役員が定期的に生徒への登校指導や、柏警察署と合同で通学路を利用するドライバーに交通安全を啓発するビラの配布も行っている

千葉県立柏高等学校(千葉県柏市) PTAと高校が一体となって生徒の交通安全意識を向上させる

協会等と相談しながら交通安全教育のテキストを作成する。「Safety Action21」* 高校生の交通安全教育のなかから、柏高校に必要な内容を選んで全30ページのテキストにしました。このテキストは入学式の時に新入生の保護者全員に配布して、保護者から生徒に手渡してもらおうにしました。保護者にも交通安全に関心をもっていただくのがねらいです。テキストを読んで勉強した後、生徒全員にレポート提出が義務づけられている。レポートの課題には交通法規や賠償に関する問題に加え、設問ごとに「一時停止の必要性について、考えたことを書いてください」といった、生徒自身の言葉で考える課題も含まれている。

真剣に取り組めば、生徒は応えてくれる

今年5月の生徒総会ではパソコンを活用して、生徒自ら撮影した実際の下校風景を見ながら、生徒同士で自転車の利用について検証するなど、生徒のなかにも交通安全に対する意識が高まっている。また柏高校では今年度、全校生徒を対象に交通安全標語の募集を行った。「S1紙の2007年5月号で紹介されていた他校の事例を参考に、『交通安全推進標語コンクール』としてPTAから提案しま



秋の全国交通安全運動期間中、柏警察署内に展示された生徒たちの標語

した」。応募作品のなかから、校長賞、柏警察署長賞など優秀作品が選ばれ、秋の全国交通安全運動期間中、柏警察署のロビーに展示された。PTA会長賞として田畑さんが選んだ作品は「急ぐなら10分早く 起きたらどうよ?」。標語の表彰の後、登校時間を早める生徒が増えたという。標語の募集は来年以降も継続していく予定だ。



今年度は損害保険会社から講師を招き、交通事故に遭った場合の対応や賠償問題をPTAの役員が学ぶための機会も設けられた

昨年7月に生徒に行ったアンケート調査では、「1学期中に、クルマや歩行者、自転車と接触したことがあるか」という質問に「ある」と回答した生徒は全体の4・2%と、取組みを始めて間もない前年同期の10・6%を大きく下回った。「信念を持って大人が行動し語りかければ、子どもたちは必ず応えてくれる。取り組んできて本当に良かった」と、この結果に柏高校の関係者は確かな手ごたえを感じているという。「社会を良くしていきたいと思う方々が連携し、意欲を失わないよう励まし合っていけば、社会は少しずつ変わっていくはずだ」。田畑さんは今年度で会長職を退くが、その後も苦労を共にしたPTAのOBと柏高校の生徒たちの安全をサポートしていく考えだ。

* Safety Action21 = (社)日本自動車工業会が開発した交通安全の授業を行うための高校教師用参考資料。1学年6〜8時限の授業を想定し、3年間で21項目の学習ができるように構成されている。次の4つの特徴がある。①交通事故の現実に向き合う ②自分で考え、実行できるようにする ③生徒が参加する授業 ④交通安全教育をすぐに始められる 以下のホームページからダウンロードが可能。http://www.jama.or.jp/safe/safety/